

河合スポーツ庁新長官

初登庁「スポーツを通じてインクルーシブな社会に」

第3代スポーツ庁長官として10月1日に就任した河合純一長官は同日、初登庁した。河合長官はパラリンピックの競泳男子視覚障害クラスの金メダリスト。これまで、パラリンピックに6大会連続で出場し、5個の金メダルを含む21個のメダルを獲得している。2021年10月から日本パラリンピック委員会委員長を務めており、9月末で退職した。職員から歓迎の拍手を受け、長官の椅子に座った河合長官は、記者団に就任の抱負として「私がスポーツ行政の長官として着任すること、スポーツを通じてインクルーシブな



記者懇で抱負を述べるとともに、質問に答える河合新長官



長官就任後初の職員訓示を行う河合新長官（文科省第2講堂）

社会、共生社会をつくっていくという大きなメッセージが大きく動き出したと国内外の皆様を感じて頂いていると思う。スポーツの価値をより高めることに真剣に取り組んでいきたい」と語った。

また、同日の記者懇談会において、長官として取り組みたいことについて「少子化が進む日本が抱える、社会課題を解決する一つの手段として、スポーツが貢献できると考えている。スポーツから、インクルーシブを発信する側になれば」と話すとともに、スポーツ庁の組織の在り方として「霞が関で、一番インクルーシブな組織になったと言われるのが理想だ」と述べた。

職員「決して諦めず前向きに」

さらに同日には、スポーツ庁職員に対する訓示を文部科学省第2講堂で行った。

定めた目標や夢を、皆様と一緒に叶えていくという決意で今日から仕事をしたいと思っています。皆様も困難な場面に直面すると思いますが、決して諦めることなく前向きに楽しみながら取り組んで頂きたい。我々がスポーツという大変素晴らしいコンテンツを扱う中で、夢や希望、笑顔や楽しみを見出せなくて、それを自治体、スポーツ団体、子どもたち、お年寄りに伝えることはできないと考えています。皆さんと一緒に笑顔あふれる、苦しいことも一緒に乗り越えられるチームを作っていきたいと思っています。

多様性と調和は、東京2020大会の一つの基本コンセプトでした。スポーツ庁が今後向き合っていくさまざまな方々、職員とコミニケーションをとる中で、中々分り合えなかったり、上手く伝えられなかったりすることが生じると思います。それは仕方がないことです。ですが諦めているわけではなく、それを課題と捉えるのか、我々が前向きに仕事を進めていくための伸びしろ、そして可能性と捉えるのが重要だと考えております。我々がインクルーシブな組織であれば、自治体やスポーツ団体やさまざまな方々にそのことが伝えやすくなり、伝わっていくはずだと思っています。そんな思いを皆様と共有させて頂き、与えられた任期を全うできるよう誠心誠意取り組んでいきたいと思っています。

スポーツ基本法、基本計画を着実に実施し、第4期の基本計画をつくっていききたい。その先の未来を、スポーツを通じて誰ひとり取り残されることなく、安心で安全でそして幸せやウェルビーイングな状態を作っていくけるような国にするために、皆さんと力を合わせて頑張り抜いていきたいと思っています。